注解『七十一番職人歌合』稿（十二）

下房俊一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第二十七番および第二十八番の注解を収めた。

二十七番　蒔絵師　貝磨

【職人尽】

〔鶴岡放生会職人歌合〕六番右　蒔絵師

月影に水きはのまさこかきませて浦にまきゑのはこさきの松

あふことをよそになしちの数はかりあはれこまかにちる泪かな

判云、月の左右哥、心詞あらぬ躰にして、得失はかはること侍り。(ママ)恋は、両首、興あるさまにとりなせり。おほかたまことなるにも狂たるにもよらす、哥ときこゆる心むけ、詞つかひはことなるものにて侍なり。可為持。

〔長崎一見　職人一首〕五番右　蒔絵師　此の岸にいかなる種をまきゑしか詠むる花の匂ひ芬々　……右は、種をまきゑしとは、其の名をあらはし、匂ひ芬々と詠まれしも、朽ちせぬこがねの言葉なるべし。とかく重き方に心を引かれ候へば、右の勝に而やあらん　〔人倫訓蒙図彙〕蒔絵師　五十嵐、蝶屋、山本、田付、原田等の家あり。中にも、五十嵐は東山殿の時、名人也。将軍慈照院義政公、蒔絵を愛し給ひて、五十嵐にかかしめ給へり。今に至つて時代物と称し、東山殿御物と号して、

世上の宝となす。其の様、比類なきもの也。重箱を始め指物の下地師、別にあつて、是を木地師といふ也。釘を用ゐず、膠にてこれを造る也。下絵書、外にあり。金銀の粉や、同切金師等、外にあり。　／　青貝師　青貝は、二条川原町を始めて、其の外所々にてこれを磨るなり。これを買い取りて諸の絵様を作り、器につくるなり。塗師、外にあつて、これを得て地を塗るなり。所々に住す。　〔用明天王職人鑑　職人づくし〕桜が色に、花塗りの吉野漆の塗師屋蒔絵屋檜皮屋に、軒の御簾屋の玉簾……　〔誹諧職人尽〕まきゑ師　小鼓や蒔絵に見ゆる松ばやし〈方閑〉　あの中に蒔絵書きたし宿の月〈はせを〉撫子や蒔絵書く人を恨むらん〈越人〉　梅一輪咲きて天下の蒔絵哉〈巴人〉　砂子地や明石の月のほのぼのと〈生花〉　蒔絵師の思はば淋し秋の雲〈文笑〉　野を見せて蒔絵塗るらん草の花〈備中成羽　依水〉　蒔絵師の手の油気に花曇〈何調〉研ぎ出しの月の光や鏡山〈咫斗〉　蒔絵師のこぼるる露の裾野哉〈水戸　来由〉　蒔絵師の心や狂ふ村紅葉〈期雨亭　婁覩〉光阿弥が目にも桜や東山〈佳境〉　蒔絵師の紙帳を花の舎りかな〈筌二〉　楢の葉の錦や奈良の古蒔絵〈寥和〉　／　貝摺浪の間や小貝にまじる萩の塵〈はせを〉　とこぶしは宵の小貝や磯の月〈嵐雪〉　かげろふや小磯の貝も吹き立てず〈晋子〉朝鮮の貝も拾はんけふの汐〈万尺〉　貝摺の鞘に暮れたる螢かな〈丈国〉　貝すりの窓を訪ふ螢かな〈柳隣〉　貝摺の耳にばかりの師走かな〈景湘〉　貝すりの寒さ忘れし水仙花〈貞芙〉　後貝と見ゆる女房や若楓〈寥和〉　〔今様職人尽百人一首〕まきゑ師　磨きつつ塗りてかくるる龍田川いつ書く泥の蒔絵乾かん　「下地のおしろいがはぢくは。七郎兵へ殿、そこのけほをよこしやされ」「泥の色も光らぬ。黒んで開いて」「此の朱色はきつふ黒んだ」　〔職人尽発句合〕五十三番左　蒔絵師　若草に鶴のあゆみや高蒔絵　蒔絵の模様しほらしう仕立てたる句がら、いとめでたし。……いづれも当道を述べしが、蒔絵の光こそなほ勝るべけれ。

【本文】

廿七番

いかけ地のところ〳〵のきりかねの
ひかりことなるあきの夜の月

きりかね―［類］きり金
ひかり―［類］光　あきの夜―［類］秋のよ

秋はけにさすかなりけりかひかたな
さやかに月のひかりさしつゝ

左右ともに、月の光とよめり。猶右は、句ことに一首の心いひあらはして、さすかすてかたし。為勝。

したへともわれをは人の日にそへて
うとくなしちのたえまかちのみ
色にいてゝひとにこゝろをくたきかゐ
あをさめはつる恋もするかな

左は、こともなくよろし。右は、まことに恋する人の面影うかひたり。猶勝へくや。

◇

まき絵し
此御たらいは、
いかけ地にせよと
仰らるゝ。手まは
よもいらし。

◇

貝すり
この太刀の
さやは、はく

秋―[類]烠　かひかたな―[類]かひ刀
ひかり―[類]光

われ―[類]我
たえま―[類]絶ま
いてゝ―[類]出て　ひとにこゝろを―[類]人に心を
くたきかゐ―[忠][明][類]くたきかひ
あをさめ―[類]青さめ　かな―[類]哉

面影―[類]面かけ　勝へくや―[忠]可勝や

まき絵し―[白][類]蒔絵士[忠]廿七番 蒔絵士（まきえし）
御たらい―[明][類]御たらひ

仰らるゝ―[白]仰るゝ[忠][類]仰られ候　手ま―[白][忠]手間

貝すり―[白][類]貝磨[忠]貝磨（すり）
この―[白][忠]此

たいのかゐか　　かゐ―［明］［類］かひ
入へき。

【語注】

◎蒔絵は、調度品などに施す漆工芸の一。漆で模様を描き、乾かないうちに金銀の粉や色粉を蒔いて付着させ、模様を表す。『鶴岡放生会職人歌合』六番右に「蒔絵師」。

貝磨は、青貝を磨りみがいて螺鈿細工をする職人であろう。夜光貝などの厚貝を彫刻して嵌め込む、平安時代以来の伝統的な螺鈿が室町時代になって衰微し、代わって、明の影響で、青貝と総称される真珠貝、鮑などの青みを帯びた薄貝を用いて螺鈿を作ることが主流となった。なお、後世の『雍州府志』七には、「青貝　螺鈿ノ用フル所。二条河原町ノ人家、之ヲ磨リ漆匠ノ家ニ売ル」とあり、貝を磨る職人と、その貝を用いて螺鈿を作る職人とは分化していたようであるが、本職人歌合の貝磨は、月の歌および絵から判断して、螺鈿細工に至るまでの工程を一貫して行ったようである。職人歌合に初出。

蒔絵と螺鈿は併用されることが多く、両職人の関係は密接。

◎**いかけ地のところ〳〵のきりかねの**　「沃懸地」は蒔絵の技法の一つで、漆塗りの上に、金粉または銀粉を一面に蒔いたもの。画中の詞にも、「此御盥は沃懸地にせよと仰らるる」とある。「切金」は、蒔絵にあしらう、方形に切った金銀などの小薄片。ここは、沃懸地の上にさらに切金を散らしたのである。その切金のように「光殊なる」と続く。

◎**ひかりことなるあきの夜の月**　光がことさら美しい秋の夜の月。

◎**さすかなりけり**　「やはり格別だ」の意の「さすが」に、「刺刀（さすが）」（腰に差す小刀。また、中世後期からは、懐中する短刀をいう）を掛ける。「をりをりに打ちて焚く火の煙あらば心ざすかをしのべとぞ思ふ〈貫之〉」（後撰集、十九、離別）は、「刺刀」を掛詞に用いた例ともされる（八代集抄所引『為家抄』など）が、それ以外では「刺刀」を歌に用いるのは異例。ここは、貝磨が細工を施す対象である「刺刀」（『新大系』は、細工用の小刀とする）を、あえて言い掛けた

のである。

◎**かひかたな**　「貝刀」で、鞘や柄に螺鈿を施した刀をいうのであろう。

◎**さやかに月のひかりさしつゝ**　「貝刀」から「鞘」を導き、「さやかに」と続ける。貝刀の鞘があざやかに光るように、さやかに月の光が射している、というのである。「光射し」の「射し」に、刀で「刺す」の「刺し」、または、刀を「差す」の「差し」を掛けるか。

◎**句ことに一首の心いひあらはして**　「刺刀」、「貝刀」、「鞘」（あるいは「刺し」ないし「差し」）と、貝磨に関係深い言葉を連ねたことを言う。

◎**さすかすてかたし**　歌の言葉の「さすが」をそのまま用いて、さすがうち捨てがたいいい歌だ、と戯れたのである。「刺刀」は常に身につけているべきものだ、の意を掛けるか。

◎**したへとも**　私の方は相手を恋い慕うけれども。「慕へ」に、あるいは「下絵」を掛けるか。

◎**われをは人の**　私を相手の方は。下句の「疎くなし」に続く。

◎**うとくなしちのたえまかちのみ**　冷たくあしらう意の「疎くなし」から、「梨子地」と続け、その梨子地のように、相手との逢う瀬は絶え間がちだ、という。「梨子地」は、蒔絵の一種で、漆塗の上に細かい金粉や銀粉を散らし、その上に透明な漆を塗ったもの。梨の表面に似ているのでこの名がある。一面の金地、銀地と違ってまばらであるから、「絶え間がち」というのである。なお、『鶴岡放生会職人歌合』六番右、蒔絵師の恋の歌にも、「逢ふことをよそになしぢの数ばかり」と、似た表現がある。

◎**色にいてゝ**　顔色に出て。外見に現れて。ただしここは、下句の「青ざめはつる」と照応し、文字どおり「色に出」たのだということになる。

◎**ひとにこゝろをくたきかゐ**　つれない相手に対して思い乱れる意の「人に心を砕き」から、「砕き貝」と続く。「砕き貝」は、細工に使うために細かく砕いた貝殻であろうが、あるいは、逆に、磨り損って砕けた、使い物にならない貝のことを言うのだとも考えられる。もし後者だとすると、次の「青ざめはつる」は、細工に失敗して動顛する意をも響か

せていることになる。

◎**あをさめはつる**　貝磨に使う貝殻が青味を帯びていることから、「砕き貝」－「青ざめ」と続く。「青ざむ」は、血の気の失せた青白い顔色になることで、ここは、恋の思いのために衰弱したのである。勿論、雅語ではない。

◎**恋もするかな**　「する」に、あるいは「磨る」を掛けるか。

◎**こともなく**　取り立てて非難すべき欠点もなく。

◎**恋する人の面影うかひたり**　「面影」は、歌論用語で、表現に伴って喚起される詩的イメージや視覚的映像（有吉保『和歌文学辞典』）。「おもかげありて優にこそ侍るめれ」（宮河歌合、二十二番判詞）、「よなよな晴るる御吉野の月、秋の空ひとへにくまなからむよりも艶に侍らむかしと、おもかげ見るやうにこそ覚え侍れ」（千五百番歌合、二百七十一番判詞）などの例がある。ここは、恋する人の顔色そのものが目に見えるようだ、というのである。「浮かび」に、貝細工の貝が浮かび上がるように鮮やかに見える意の「浮かび」を掛けるか。

◎**御たらい**　「盥」は、手や顔を洗ったり、口を漱いだりするのに使う椀形の容器。中世の物は、多く木製黒漆塗りで、左右に把手が二本ずつついている。この種の盥は、絵巻物の剃髪の場面などにしばしば描かれており、ここも「御盥」と言い、また、蒔絵を施すのであるから、そうした儀式などに用いる高級品であろう。なお、「盥」という言葉が一般に、洗濯などに用いる大型の桶盥を指すようになったのがいつごろからかは明らかでないが、いずれにしても、そうした大型の桶盥が普及したのは、近世以降のことである（日本史小百科17　家具）。

◎**仰らるゝ**　忠寄本、類従本は、「仰られ候」。白石本は、「仰るゝ」と読めるが、「仰れ候」とも読めなくはない。

◎**はくたい**　「莫大」ないし「莫太」と書いて、「ばくたい」と読む。程度がはなはだしいさま。また、量が非常に多いさま。ここは、後者の意。

【絵】

蒔絵師は、烏帽子を被り、片肌脱ぎで袴を履く。台（白石本、忠寄本は脚の形に小異、明暦板本は脚のない台）に載

せた盥の前に坐し、漆刷毛を持って漆を塗る。台の右に、漆を入れたと思われる小皿、左に、蒔絵を施した（明暦板本、類従本は漆のみ）蓋付きの椀と食籠風の器一式。横に漆桶と思われる曲物と器（同様の器は、第三番塗師の絵にも描かれている）一つ、および筆様の物二本（未考）。白石本、忠寄本は、台の上、盥の左に、筆と漆刷毛。台の右は、椀状の器。左に水瓶と食籠風の器一式（忠寄本の食籠風の器以外は白地）。横に、漆桶と思われる曲物と器一つ。筆様の物はない。

貝磨は、烏帽子を被り、諸肌脱ぎで袴を履く。左脇に刀（または太刀）の鞘を掖み、右手に漆刷毛を持つ。前に、貝らしい物の入った箱と曲物様の器（白石本は、箱、器とも中身を描かない。忠寄本は、箱の中身に小異。器の中身は描かない。明暦板本、類従本も、器の中身は描かない）、漆刷毛二本、針様の物二本（白石本は、箆様の物一本。忠寄本は、箆様の物二本。いずれも未考）、刀（または太刀）の鞘、大小二本。

【参考】

○秀武に妻の云ふ様、この七条にある物は、いかにまれにもただある物はなし。太刀作、銅細工、蒔絵師なり。わぬしは年を経れども、いといたづらにてことはあめれ。（後崇光院筆『福富草紙』断簡）

○この王国全体にゆきわたっている絵画に関係する一つの技術がある。それは漆を塗る技術である。……こうしてほとんどすべての物に用いるので、この技術はこの王国全土の最も一般的な技術となっていて、絵を描く技術とも結びついてそれに随伴している。というのは、この職人たちのなかに、これまでに見出されたこの種のものでは最良の作品に一種の金箔をほどこす特定の職人（蒔絵師）がいて、彼らは固い金粉でさまざまな物を描き、金と銀の薄片でできた花（ロージャ）とか、比類のないほど贅沢に細工された真珠貝とかを、それに填めこむ仕事をするからである。しかし、それはあまりにも高価なので、領主や富豪だけが用いることができる。もっともこの類のもので外見上は一部分これに似てはいるが、出来具合も、光沢も、値段も大いに異なり、それほど高くない別種のものもある。そしてこの第二種のものが王国における教養あり名誉ある人士の間で盛んに用いられている。またこの第二種の良質のものよりはるかに劣るものではある

が、この種の机その他の器物のいくらかは、エウロッパに伝わっている。そしてそれには贋物があり、それが見分けられない人はだまされてしまう。シナ人は金を被せたものをいろいろと持っており、また彼らの間ではこの漆の使用ははなはだ盛んであるにもかかわらず、彼らは日本の金製品〔金蒔絵〕を大いに珍重し、それを価値あるものと思っている。また漆だけのものでも同様である。このわけはシナ人は金の純度を多くしても、この技術では日本人に及ばないものと考えているからである。

（日本教会史、二巻三章）

二十八番　絵師　冠師

【職人尽】

〔鶴岡放生会職人歌合〕五番左　絵師

おなしくは月のゑしまをみにゆかん波のしほ草かきやよすると
くろかみをやみのうつゝにかきやりて見ぬ面影をうつしかねつゝ

判云、月は……ゑしまの波は、見ところたちきさると申へし。恋の番も、左、やみのうつゝは優に侍へし。……猶左の勝にこそ。

〔吾吟我集〕寄絵恋　写し絵に向かふがごとくつれなきは我に物をも言はず笑はず　〔訓蒙図彙〕画工（ぐわこう）　ゑし、画師（ぐわし）也。

〔長崎一見　職人一首〕五番左　絵師　春斗色香をうつしゑも知れぬ心の花の作意ならまし　左、作者、ゑも知れぬ心の内を筆の先にあらはしたるもしほらし。……右の勝に而やあらん。　〔大団〕寄絵恋　美しと見ゆればげにはいたづらに心をとむる床の浮世絵　〔人倫訓蒙図彙〕絵師　唐土の偃師といふ者、秋の月の水中に映るを見て書き初めしとかや。日本にては、仁徳天皇の御宇、嘉佐金岡、絵師の元祖として、千枝常度など名人也。今都におゐて、狩野家并びに土佐家あり。又は、

俵屋流、野々村友松、海北、其の外あまたの流あり。又、仏像を描くを絵所といふなり。仏絵師、室町六角通下ル町、木村了琢、其の外、左京、徳応左助等あり。細金師、諸の彩色に有る事なれども、専ら仏像の絵に是を用ゆ。金銀の薄を細かに刻みて衣紋をなし、花の筋を分かつ。細金師は絵師に従ふ也。〔狂歌ますかがみ〕寄絵無常　人命の不定の程はしら鳥の鳥羽絵の足の心細さよ　翁評云、姿やさしく別して御秀逸。しら鳥の鳥羽絵とは、古き詞を珍しく御とりなし、是等心詞共に艶にやさしきと申し候ふ。狂歌は紙子に錦の裏を付け候ふ。大方、人の狂歌、布子にあかね毛綿裏に候ふ。〔誹諧職人尽〕絵師　朝顔は下手の絵にさへ哀れ也〈はせを〉　大和絵のまこと少なき柳哉〈仙鶴〉　時雨行く山や絵書きの筆の先〈小田原　巴丘〉　雪の日や絵師の胡粉の解き合はせ〈深川軒　仙子〉　焼き筆の山は淋しに夕時雨〈晋如〉　干す絵絹一枚づつや菊畑〈笙和〉　土佐流の花は千枝を元木かな〈寥和〉　／　冠師　冠着て頭と知れし厚衾〈野水〉　業平を女につくる菊苗や〈馬勃〉　冠師の心に厚き牡丹かな〈友以〉　玉の春たまの仰せもかうむり師〈寥和〉　〔今様職人尽百人一首〕絵師　あまた皿塗る彩色の水にかは絵具の色に出でし艶隈　「極彩色と申すはこれかなもし。見事なことでござります」「いや、中でござります」「これは探幽の筆でござりますか」　〔彩画職人部類〕冠　それ冠の濫觴は、人皇第四の帝懿徳天皇、天地人の三冠を制したまひ、其の後天武の帝の御時に至りて、男女初めて髪を結ふ事をなす。是より漆塗りの冠を用ひて礼儀定まれり。今の紗冠、烏帽子もここに起こるといふ。又、文武帝の比より、厚額、薄額、透額を制す。透額は、其の頂きに織月のごとく羅をもて張る。世に月額ともいへり。十五歳以上の童子、爰に壮気を洩らさせん事を謀ると。かしこくも君が代の御恵み、仰ぐも恐れあり。百官儀々として是を頂く。烏帽子は、数品算ふるにいとまなし。中にも、風折烏帽子、在五中将業平を始めとすといふ。〔職人尽発句合〕三十四番右　画工　薄墨の淵に鯉あり夏の川　絵は風姿を主とす。淵底の鯉魚の踊り出づべき勢ひも言葉に浮かびて、写し得たりといふべし。両道ともに筆力あらはれて、勝劣有るべからず。「馬遠を学ぶも亦しかり」　／　五十二番右　冠師　雪に化粧ふ初冠や位山　位山の初雪は、光る君の初冠にみづら結ひ給へるつらつき、顔のにほひにたぐへていつくしきけしきなりといふか。月（沓師の歌）も雪もいと興あり。〔略画職人尽〕唐絵具使ふ絹地の緑青に葛をまづかく秋の七草

注解『七十一番職人歌合』稿（十二）

【本文】

廿八番

後しろしみねのもみちのしたえより
色とりいつる夜半の月かけ
ふくるまて雲井の月になかむとて
かふりのかけもかたふきにけり

左哥、たくみにきこゆ。右は、ことの外に風情つきたり。以左為勝。

うらめしやすみ絵ならぬに玉つさの
たゝ一ふてにかきすつるかな
くらき夜のかふりのゑいやとられけん
人にしられぬわかおもひ哉

左、させるなんなくきこゆ。右は、故事を思てしかもその心あり。いとやさしく侍。仍為勝。

◇　◇

絵師
すみ絵は
筆勢か
大事に
て。

みねのもみちのしたえ―[類]峯の紅葉の下枝
月かけ―[類]月影
かふりのかけ―[類]冠の影
ことの外に―[忠]ことの外
うらめしや―[類]恨めしや　すみ絵―[類]墨絵
たゝ一ふてに―[類]唯一筆に　かきすつるかな―[類]書すつる哉
夜の―[類]よに　かふりのゑい―[類]冠のえい
わかおもひ哉―[類]我思かな

絵師―[忠]廿八番　絵師
すみ絵―[白][忠]墨画[類]すみゑ
大事にて―[白][忠][明][類]大事にて候。

冠師　　冠師―[白]冠屋[忠]冠屋[明]ナシ
別当とのゝ御　　御はいか―[白][忠]御拝賀、
はいかにめさるへき
御かふりにて候。
いそかしや。

【語注】

◎絵師は、主に俗人の専門画工を言い、それに対して、宮廷や幕府の絵所に所属する絵師を絵所絵師と言った。また、有力寺院の絵所に所属した絵仏師をも略して絵師と言った（国史大辞典「絵師」の項）。ただし、ここでは、宮廷の絵所絵師（当時の実態については未考だが）か、そうでなくても、堂上家と関係の深い絵師を想定し、同じく堂上家と関係の深い冠師と番いにしたか。『鶴岡放生会職人歌合』五番右に、「絵師」。

冠師は冠を作る職人。職人歌合に初出。

◎後しろし　未考。「後白し」という用例は管見に入らないが、月が中天に上った後、白く冴えることをいうか。

◎**みねのもみちのしたえより色とりいつる夜半の月かけ**　未考。峰の紅葉を、下枝から順に色どりながら出る月、の意であろうか。ただし、そのような発想の歌は他に管見に入らない。『新大系』は、峰に生えている紅葉の下枝より、赤い色を取り入れて出てくる夜半の月、と解する。「夜半」は、初句の「後白し」を考慮すれば、峰を出た月が、深夜に至った今は中天にかかっているの意かとも思われるが、この解はかなり無理があろう。また、月の出が深夜だとすると、その月は満月でないことになり、一首としても、歌合の歌としても不自然である。ただし、「夜半」が必ずしも深夜ではなく、広く夜間を指す（『名語記』二に、「ヨハヲバ夜半ト書ケル歟。但シ、カナラズ夜半ナラザレドモ、夜ニ入リヌレバヨハトノミ使ヘリ。ヨハノ月、ヨハノ嵐、ヨハノ床ナドイヘルハ、時尅ヲ指セリトハ聞コエズ」）とすれば、この点は無理なく解釈できるか。「下枝」に「下絵」を掛け、「色どり」も絵の縁語。また、「色どり」は、上句の「後白し」と対応

するのであろう。

◎**雲井の月になかむとて**　「雲井（雲居）」は、単に空の意ではなく、宮中の意を掛けていると見るべきであろう。その方が、下句の「冠」が生きてくる。「〜にながむ」という言い方は、多くはないが、「身の程も知られぬ物は秋の夜の月にながむる心なりけり〈最慶〉」（続詞花集四、秋上）、「年々の春の情もいくかへり花にながめて移り来ぬらん〈公顕〉」（文保百首、春）などの例がある。月の下で物思いにふける、というのであろう。

◎**かふりのかけもかたふきにけり**　月が西に傾いて、我が身の影も長くなったということを、冠に引き寄せて言ったまであろう。

◎**ことの外に風情つきたり**　「ことの外に」は、忠寄本は「ことの外」。意味は通じるが誤脱であろう。「風情尽く」は、趣向の目新しさを求めて奇抜に走ること（二十四番語注「風情つきて聞ゆ」の項参照）。直接には、影の傾くことを言うのに、あえて冠を持ち出した点について言うと思われるが、暗に、歌合に傾く月を詠んだことをも難ずるのであろう（一番語注「哥合にはかたふく月あやなくきこゆ」の項参照）。

◎**すみ絵ならぬに玉つさのたゝ一ふてにかきすつるかな**　「ただ一筆にかき捨つる」に、墨絵を一息に描ききる意と、恋文をなおざりに書きなぐる意とを掛ける。「玉づさの便りにあらぬ一筆の絵にかきやすき秋のかりがね〈信実〉」（新撰六帖、六）の歌（絵と手紙との関係が逆であるが）の連想があったかもしれない。

◎**くらき夜のかふりのゑいやとられけん**　「くらき夜の」は、類従本は「くらきよに」。いずれにしても意味は通じるが、類従本の誤写であろう。『蒙求』、「楚荘絶纓」句の注に引く『説苑』復恩に見える故事によれば、楚の荘王が群臣に酒を賜った時、たまたま燈が消えたのをよいことに、女官の衣を引く者があった。彼女はその者の冠の纓を切り取って、王に訴えた。しかし、王は、それほどのことで士を辱めるべきでないとして、その席に居合わせた全員に纓を切らせた。後年、楚が晋と戦った時、常に王の前にあって勇敢に戦う者があった。王が不思議に思って訳を尋ねると、先年罪を免れた者であった、という。（以上、徐注本による。ただし、同説話は、『唐物語』や『蒙求和歌』などにも取られているから、古注本にも同様の注があったと思われる。本職人歌合の歌が直接に拠ったのがいずれの系統の注文であったのか、

あるいは、そのいずれでもなく、『唐物語』や『蒙求和歌』などの和書であったのか等については明らかにしえないが、この説話が日本で広く流布していたことは間違いない。）なお「纓」は、中国では、冠をとめる頤紐のことであるが、日本では、冠の後ろに垂らす短冊形の羅（うすもの）を言う。私の身は、暗い夜に冠の纓を取られたあの故事のようなものなのであろうか、と下に続く。

◎**人にしられぬわかおもひ哉**　そのように、相手に知られない我が思い。「人に知られぬ」は、単に、纓を切り取るほどに相手がつれない、の意にも解しうるが、ここは、荘王の恩情によって、幸いに乱行が王や臣下の人々に知られずに済んだ、という故事を、あえて曲解して、折角の恋情が不運にも相手の人に知られずに終わった、と解したのだと見た方がおもしろい。

◎**故事を思てしかもその心あり**　故事を思い起こして、しかも、その故事をよく理解した詠みぶりだ、というほどの意味であろう（十番語注「心あるにこたり」の項参照）。前項に述べたごとく、「人に知られぬ我が思ひ」を、楚荘絶纓の故事をあえて曲解した言葉だと解しうるとすれば、この判詞は、皮肉を言ってからかっていることになる。

◎**いとやさしく侍**　「やさし」は、歌論用語で、女性的な優美、繊細な感情や情趣についていう（和歌大辞典「やさし」の項）。ただし、これも真面目に言っているのではなかろう。

◎**すみ絵は筆勢か大事にて**　「大事にて」は、白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は「大事にて候」。「墨絵」は、『ヴィジュアル史料　日本職人史〔I〕』は、「白描画のことであろう」とするが、白描画にことさら筆勢というのはいかが。また、実際に描かれている絵も、淡彩の水墨画のように見える。例えば、『新撰菟玖波集』に、「けだ物の姿に似たる炭を見よ／絵にあらはるる筆の勢ひ〈法眼紹永〉」というのも、水墨画のことをいう。

◎**冠師**　白石本は「冠屋」、忠寄本は「冠屋」の「屋」の右に「師」と校合。明暦板本は、この職名を落とす。

◎**別当とのゝ御はいか**　単に「別当」というのは、検非違使の別当のことであろう。ただし、検非違使別当に関しては、文明十八年八月、藤原量光が辞任して以降、明暦元年十月、藤原隆貞が補任されるまでの百数十年間は、『大理補任』などにも記録がなく、実態は不明である。「拝賀」は、「慶賀」とも言い、任官された者が参内して、天皇に任官の喜び、

謝意を奏上する儀式。

【絵】

絵師は、立烏帽子、直垂、袴姿で、画紙の前に坐し、右手に筆を持って絵を描く。絵は淡彩の水墨画か。木の枝が描かれていて、花鳥画風。画紙の右に硯、左に筆掛に並べた筆四本、曲尺、絵具皿三つ（類従本は、二つ）。うち一つには青い絵具、別の一つには赤い絵具と、絵具を解く道具かと思われる棒または箆状の物を入れる。白石本、忠寄本は、絵は、樹下の禅僧。その他、硯、筆、絵具皿等の描き方に小異がある。曲尺は描かない。一般に堂上家の用いる立烏帽子を被っているのは、この絵師が堂上家との関係が深いことを示すのであろう（語注参照）。

冠師は、立烏帽子、直垂、袴姿で、左手に冠を持ち、右手に漆刷毛を持つ。前に漆桶と思われる曲物らしい桶と、小皿（未考）。白石本、忠寄本、類従本は、直垂の紐を描き落とす。前の小皿は、白石本、忠寄本は、椀状。冠師も堂上家との関係が深く、立烏帽子を被っている。

【参考】

○　玉の緒にせむ面影もがな
　ふたたびと帰らぬ人を絵にとめて　〈智蘊法師〉　（新撰菟玖波集）

○　めづらしと見る今の一筆
　昨日まで雪を絵しまの朝霞　〈宗祇法師〉　（同）

○　霞さびしく暮れ残る山
　里遠きけぶりのうちは墨絵にて　〈三条西実隆〉　（同）

○　似たれども似ぬ事多くある物を
　匂ひをくるる筆の写し絵　〈多々良政弘朝臣〉　（同）

○　けだ物の姿に似たる炭を見よ
　絵にあらはるる筆の勢ひ　〈法眼紹永〉　（同）
○　かしこき心ふたりとは見ず
　絵にかくもただその夢のかたちにて　〈源政春〉　（同）
○　絵にとめてふりにし人をしたふ世に
　仰げば高し敷島の道　〈十輪院入道前内大臣〉　（同）
○　その写し絵を見する春秋
　唐人の御影を祭る年ごとに　〈寿官法師〉　（同）
○薄墨に絵がける雪の夕哉　〈法眼専順〉　（同）
○　しるしをく其の代を見るや筆の跡
　似せ絵は親に会ふごとくせよ　〈日晟〉　（文安雪千句、九）
○　魚の寄るところもしるく鷺おりて
　まことに似たる筆の写し絵　〈宗春〉　（因幡千句、十）
○　見てこそは思ひをそれと定めまし
　伝へ聞く代の絵にかける主　〈勝元〉　（熊野千句、九）
○　知らずえびすの国に入る人
　絵にかける女や姿変はるらん　〈長敏〉　（河越千句、十）
○　罪にあたるを見てぞ驚く
　後の世のはげしき山を写し絵に　〈宗友〉　（葉守千句、七）
○　とだえて見ればただ知らぬ人
　写し絵もなかば消えぬる筆の跡　〈玄清〉　（東山千句、八）

○　をけば扇の冷しき色
　写し絵も古き跡こそはかなけれ　　〈泰諶〉　　（池田千句、三）

○　雨の音をも詠め捨てめや
　船維ぐ夜の景色を写し絵に　　〈肖柏〉　　（池田千句、九）

○さる方へ絵を書きに行たれば、中々美しい上臈衆が廿人斗出させられて、やれ〳〵、ここな男は美しい絵を書くと仰せられた。中にも、廿斗な上臈の、とりわき美しいが、やれ、此の扇に絵を書いてくれよと仰せられた。かしこまつたと申して、戯れ絵などを書いて進上申したが、あまり堪へかねて、かの扇を参らする時、お手をそつとしめたれば、につと笑わせられたお顔が、今に忘られいで、則ち恋となつてかやうに狂気する。　（天理本狂言、かなおか）

○われらにおいては、立派な油絵の祭壇画はときには非常に高価である。日本では、油絵具を用いない。そして黒い墨汁（テインタ）で描いた肖像画が、ときにはなんと数千クルザードに評価される。　（日本覚書、五）

○われらの〔家屋？〕は、装飾壁布（タペサリア）、鍍金皮壁掛（ゴドメシ）、フランドルの（ゴブラン）織で飾られる。日本のは、鍍金されたり、黒い墨で描かれたりした紙の屏風（ビョウブ）で飾られる。　（同、十一）

○われらにおいては、絵画に多くの人が描かれていればいるほど（見る人の）目を楽しませる。日本では、それが少ないほど喜ばれる。　（同）

○前述以外の技芸のなかで彼らの間において一つの主要なものとされているのは絵画の技法（アルテ）である。この技法において彼らは、自然の事物を描くのに、できる限りすぐれた類似性をもって自然を模写することにおいてきわめて優秀であるが、架空で想像上の事物を描いた絵画では、才能を発揮して、大いにそれらしく作りあげるのであって、あるがままの自然に従っているのではない。たとえば想像上のさまざまな花（ローザ）や形を技巧的に組み合わせたり挿入したりするとか、その他この種のことをする。普通一般に、彼らはその憂愁な気質からして、ものさびしく郷愁をそそる絵画に心を引かれる。たとえば一年の四季であれば、それらの各季節に成育し存在するふさわしい事物によって、それぞれの季節にその色を割り当てる。……彼らはそれら〔四季〕の絵画を座敷〔の襖〕または屏風（バイネール・デ・アルマサン）に次々と並べて描いていく。彼らはまた

木や、草や、花や、鳥や、あらゆる種類の動物をごく自然に描くことにはなはだ巧みである。さらに、うす暗い森林、山嶽、巌石、それを伝って流れ落ちる水。人里離れたところにある隠者の山寺、林間の峡谷、川と湖、遠くに船を浮かべた海〔などを描くことも同様に巧みである。〕

さらに、日本とシナの物語でよく知られた辺鄙な八つの場所があって、それを八つの景色という意味で、八景fackeyと呼んでいるが、彼らはそれを描いて大いに珍重するのである。……これらはすべて、彼らの気質からして、彼らに強い懐旧の念と静かな寂寞の感を引き起こすものである。彼らはまた物語や名高い故事をも絵にする。たとえば、非常の場合において息子どもが年老いた両親に対してなした二十四の孝順の物語とか、また〔逆に〕両親が息子どもに従ったという物語などである。

壁につづれ織や絹の壁飾りを用いないが、壁そのもの全体が絵となっている。それは家屋について話した時に述べたように、割板でできた漆塗りの画板の上に描かれるか、あるいはまた屏風biubos〔biōbos〕と呼ばれ、六枚ないし八枚の画板をたがいに連結した一種の装置に描かれる。……

三種類の絵画、すなわち色絵yeroye〔yroye〕、墨絵sumiye、泥dey があって、（油で描くことは知らないので）のりで絵具をこねる。第一の〔色絵〕は色彩や金箔で描かれて、慶事用のものである。第二の〔墨絵〕は墨の絵具〔墨〕またはそれに水を混ぜたものを使うが、この絵はきわめて巧妙であり、優秀である。これが日本人生来の気質に合致しているために、これを大いに楽しむ。この種の絵のなかには、昔の有名な画家の手になるものがいくつかあって、それらは彼らの間ではなはだ珍重され高価なものである。また数寄sukiや茶の湯chanoyu には、此の種のものを用いる。第三のものは、彼らが泥dey と呼んでいて、金を粉に碾いたものを使う絵である。泥とは泥すなわち金の泥を意味し、これで大変美しく立派な絵を作り、また金箔の代りに色絵と併わせて非常に価値ある荘重な絵に作りあげる。これらの絵においても、彼らははなはだ巧みですぐれている。……

（日本教会史、二巻二章）